

# 小学校国語科における個別最適な学びと協働的な学びの実現に向けた検討

－ ロングレンジの学習活動を位置付けた授業実践の開発 －

水戸部 修治  
(教育学科教授)

個別最適な学びと協働的な学びの実現を目指す上では、学習者自身が学びを最適なものに調整することができるような手立てを講じることが重要になる。本論考では、小学校国語科の授業改善を通し、具体的な学びの姿として、子供たちが魅力的なゴールに向かって自律的に学びを進めるロングレンジの学習活動を提案するとともに、実践事例を元にその実現のための手立てを検討した。

キーワード：小学校国語科，個別最適な学び，協働的な学び，ロングレンジの学習活動，授業改善

## 1. 問題の所在

中央教育審議会の令和3年1月の答申において、個別最適な学びと協働的な学びの実現が提言された。この答申の本来の趣旨を踏まえた授業改善を進めることは極めて大きな意義をもつものと考えられる。しかし、そのための具体的な学習や、それを支える指導の在り方は、現段階では必ずしも明らかではない。そこで本論考においては、対象を小学校国語科の学習指導に絞り、その具体的な在り方について実践事例を元に検討する。またその過程で浮かび上がった、魅力的なゴールに向かう中で子供自身が自律的に学びを進める学習を実現するロングレンジの学習活動の特徴や留意点について明らかにすることを目的とする。

## 2. 小学校国語科における個別最適な学びと協働的な学びの実現

### (1) 中央教育審議会答申における個別最適な学びと協働的な学び

令和3年1月の『『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申)』(注1)(以下、中教審答申)では、

「3. 2020年代を通じて実現すべき『令和の日本型学校教育』の姿」,「(1) 子供の学び」で、「個別最適な学び」を次のように規定している。

○全ての子供に基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させ、思考力・判断力・表現力等や、自ら学習を調整しながら粘り強く学習に取り組む態度等を育成するためには、教師が支援の必要な子供により重点的な指導を行うことなどで効果的な指導を実現することや、子供一人一人の特性や学習進度、学習到達度等に応じ、指導方法・教材や学習時間等の柔軟な提供・設定を行うことなどの「指導の個別化」が必要である。

○(中略)教師が子供一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することで、子供自身が学習が最適となるよう調整する「学習の個性化」も必要である。

○以上の、「指導の個別化」と「学習の個性化」を教師視点から整理した概念が「個に応じた指導」であり、この「個に応じた指導」を学習者視点から整理した概念が「個別最適な学び」である。

またこれに先立ち、子供たちの多様化の現状として、特別な支援を必要としている子供の増

加、外国人児童生徒や日本語指導を必要としている児童生徒の増加、経済的に恵まれない子供の増加等を指摘している。(注2)

## (2) 小学校国語科が目指す個別最適な学びと協働的な学びの実現のポイント

本論考では、個別最適な学びと協働的な学びの実現を目指す上で、小学校国語科の学習指導を対象として検討していく。

筆者はこれまでに、国語科における個別最適な学びと協働的な学びの一体的な実現について基礎的な検討を行ってきた。(注3, 4)中教審答申の趣旨を踏まえつつ、国語科の指導のねらいを明確にすることやそれを子供たちが自律的に学び取っていくための学習活動の在り方などについて検討を行ったものの、十分な整理には至らなかった。そこで、この検討を土台にしつつ、その後の授業実践開発の成果やその整理をも踏まえ考察を進めていくこととする。

前掲の中教審答申の指摘を踏まえると、小学校国語科の学習指導において、個別最適な学びと協働的な学びの実現を目指す上では、次のような点が重要になるものと考えられる。

### ①目の前の子供たちが多様な実態にあることを前提とした授業づくりを進める

中教審答申が指摘するように、子供たちの実態は極めて多様化している。そのため一斉学習場面での発問や指示に素早く対応できる子供を中心に想定して学習指導を行うのみではなくなってきている。例えば支援を要する子供が複数在籍しているといった状況を踏まえ、国語の学習に苦手意識を感じる子供も、学ぶ楽しさを実感できるような手立てを講じることが重要になる。

### ②国語科の本質を押さえた授業改善を行う中で個別最適な学びを支える学習指導を進める

子供たちの多様な状況を踏まえて学習指導を行う場合、個に応じた指導を十分工夫することとなるが、活動や教材の選択肢が広がる分、国語科の学習指導としてどのような資質・能力の育成を目指すのかを一層明確に把握することが求められる。

国語科では単に面白おかしい活動をすればよいのではない。また、知識・技能を訓練するようなドリル学習を中心とするものでもない。国語科でねらう指導事項に示す資質・能力を確実に育むことを目指して言語活動を設定することとなる。これは、学習指導要領の教科目標の冒頭に示す「言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。」という国語科の学習指導の基本的な枠組みを踏まえたものである。すなわち、国語科の学習指導の本質的な枠組みを踏まえて授業改善を進める中でこそ、個別最適な学びも子供にとってより意味のあるものとなると言える。

### ③「教師がどう教える」という視点以上に「子供がどう学ぶか」という視点を重視する

中教審答申は、個別最適な学びについて、『『個に応じた指導』を学習者視点から整理した概念が『個別最適な学び』である。』としている。国語科の学習指導を検討していく過程では、子供の主体的な学びを重視して授業構想を進めるものの、つい教師がどう教えるかに重点が置かれ、子供の側からの視点での検討がなされにくい状況も多く見られてきた。授業構想においては、教師側としてどのような資質・能力を育成するのか、またそのためにどのような言語活動を通して学習指導を行うのかを検討することとなる。それと並行して、子供はその学びをどのように受け止めるのかを想定することが重要になる。より具体的に言えば、学習指導の構想過程や、いったん構想ができた段階で、「その学びは子供にとって必然性のあるものか」という視点で再検討しつつ授業づくりを進めることが大切になると言えるだろう。

学びが子供たちにとってやりがいや価値を実感できる必然性のあるものとなることによって、その学びは子供たちの資質・能力としてよりよく定着すると考えられるからである。

### ④子供自身が、学習方法や手順、学習材や学習課題を自律的に判断できる手立てを講じる

中教審答申では、「子供一人一人の特性や学習進度、学習到達度等に応じ、指導方法・教材

や学習時間等の柔軟な提供・設定を行うことなどの『指導の個別化』が必要」であることや「子供一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供すること」など、個に応じた指導が必要であることが指摘されている。これらを学習者視点から捉え直せば、子供が自らの関心や目的等に応じて、学習方法や教材、学習時間、学習課題等を選択し、学びを最適なものにできるよう調整しようとする姿であると考えられることができる。

こうした自律的に判断して学ぶ姿を一人一人の子供が実現するためには、緻密な教師の手立てが必要になる。個別最適な学びの実現に向かうためには、子供任せの授業では十分ではない。むしろ教師が逐一指示発問して子供を一律に動かす指導よりも、より周到な準備が必要になる。

### 3. 小学校国語科における個別最適な学びと協働的な学びの実現を目指す授業構想の視点

前節までの整理を踏まえ、以下具体的な授業構想のポイントを整理する。

#### (1) 指導のねらいにふさわしい魅力的なゴールとなる言語活動を設定する

これまで述べてきたように、言語活動を通して指導事項を指導するという国語科の基本的な枠組みを押さえた授業づくりを進めることが前提となる。より具体的には、指導事項の趣旨を的確に把握した上で、その指導事項を指導するのにふさわしい言語活動を、単元全体に明確に位置付け、学習のゴールを子供と共有できるようにするのである。こうした授業づくりは同時に、子供たちが自らの学習を調整しようとする姿を引き出すことに大きく貢献する。その場その場でどんな学習活動を行うかを考えるのではなく、単元全体のゴールに向かう見通しがあることで、自らの学習を調整しやすくなるからである。

#### (2) 教材などの選択の余地をもたせる

教材を教えるのではなく、教材で教えるといったことは従来から言われてきた。また近年

は、「読むこと」の学習指導において、教科書教材にとどまらず、関連する他の作品を、単元を通して学習材として活用し、指導の効果を飛躍的に高めている授業も盛んに開発されている。個別最適な学びを目指す上ではなおさら、一律に同じ教材を教えねばならないのではなく、指導のねらいに応じて子供自身が学習材を選択できるようにするなどの工夫が重要になる。

#### (3) 学習活動の時間や方法を自律的に判断できるようにする

個別最適な学びを一層質の高いものにする上では、前述の(1)、(2)を前提としつつ、学習時間や学習の具体的な方法も工夫できるようにすることが有効である。授業づくりにおいては、教師の的確な発問や指示が重要になる一方で、そうした発問や指示がなければ一歩も前に進まない学びの実現を目指すわけではないだろう。そのためには、学習活動を教師が細切れに設定するのではなく、子供自身が判断して実行したり、試行錯誤したりできる、一定程度長い時間を確保した柔軟な学習活動の枠組みが望まれる。このような自律的な学習活動を、ロングレンジの学習活動と呼ぶこととする。

#### (4) 子供たちが自律的に学習を判断できるような支援の手立てを講じる

ロングレンジの学習活動を通して真に子供たちが個別最適な学びと協働的な学びを実現させるためには、子供たちが魅力的なゴールに向かう中で自律的、かつ協働的に学び進められるようにするための、教師の緻密な配慮が必要になる。その要件や具体的手立てについて、以下授業構想及び実践事例を元に検討していく。

## 4. 授業構想の具体例

### (1) 授業実践の概要

本実践は小学校第2学年の児童を対象に、令和3年10月29日に実施されたものである。

(注5) 筆者は授業実践者と共同で授業構想を進める機会を得、8月から検討に参加してき

た。

当該の単元は、アーノルド・ローベル作「おてがみ」を中心学習材とし、シリーズ作品を並行的に読み進めた上で、お気に入りの作品について、大好きな場面をペープサートで演じると

いう言語活動を設定して行われた。

## (2) 単元の指導計画

以下、授業者の北川彩氏による本単元の学習指導案(抜粋)を掲載する。(※は筆者による。)

## 第2学年国語科学習指導案

日時：令和3年10月29日(金)5校時

学級：第2学年1組28名

1 単元名「なりきりペープサートをしよう！～そうぞうしたことを生かして読もう～」

(「おてがみ」光村図書2年下／「がまくんとかえるくんシリーズ」)

2 単元の見込み

○語のまとまりや言葉の響きなどに気を付けて音読することができる。〔知識及び技能〕(1)ク  
◎場面の様子に着目して、登場人物の行動を具体的に想像することができる。

〔思考力、判断力、表現力等〕C(1)エ

○楽しんで読書をし、国語を大切に、思いや考えを伝え合おうとする。

〔学びに向かう力、人間性等〕

3 単元について(略)

4 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
語のまとまりや言葉の響きなどに気を付けて音読している。 (1)ク	「読むこと」において、場面の様子に着目して、登場人物の行動や会話について具体的に想像している。 (C(1)エ)	積極的に、場面の様子に着目して登場人物の行動を具体的に想像し、今までの学習を生かしてペープサートで表現しようとしている。

5 指導と評価の計画(全11時間)

◇実線は、「読み解く力」のAの側面、波線は、Bの側面に関わる留意点や評価規準

次	時	主な学習活動	指導上の留意点・ICTの活用	評価規準・評価方法
0		○各教科でペアやグループでの交流をする。 ○朝学習の時間などに絵本の読み聞かせをする。 ※1	・交流が上手くできたペアやグループにポイントを尋ねて学級全体で共有する。	
一	1	○単元のゴールや目的を理解し、学習の見通しをもつ。 ○教師の読み聞かせを聞き、物語の展開をつかむ。	・6年生にペープサートをするという単元のゴールと付けたい力を共有する。 ・教師が作成したペープサートモデルを動画(がまくんとかえるくんシリーズ)で提示し、ゴールイメージをもてるようにする。※4 ・挿絵をもとにあらすじを確認できるようにする。	

二 一	2	○「おてがみ」の中からペープサートにしたい大好きなところを見つけて音読する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大好きなところは厳密な範囲指定はせず、「この辺が好きだな」という大まかなものでよいとする。</li> <li>・自分でペアを見つけて交流ができるように、<u>全文掲示にそれぞれの児童の大好きなところが分かるように名前の付箋を貼る。</u></li> </ul>	<p>[知・技] 観察</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「おてがみ」の中からペープサートにしたい大好きなところを見付け音読している様子。</li> </ul>
	3	○並行読書の本から紹介したい話を選び、大好きなところを見つけて音読する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大好きなところは厳密な範囲指定はせず、「この辺が好きだな」という大まかなものでよいとする。</li> <li>・自分でペアを見つけて交流ができるための<u>並行読書マトリックス</u>を使用し、<u>掲示する。</u> ※5</li> </ul>	<p>[知・技] 観察</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・並行読書のお話の中からペープサートにしたい大好きなところを見付ける様子。</li> </ul>
	4	○「おてがみ」の大好きなところをペープサートを動かしながら音読する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本文を音読しながらペープサートを動かすことで、文章から離れた想像にならないように<u>支援する。</u></li> </ul>	<p>[思考・判断・表現] 観察</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・想像したことを生かしてペープサートを動かしながら音読している様子。</li> </ul>
	5	○並行読書のお話の大好きなところをペープサートを動かしながら音読する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本文を音読しながらペープサートを動かすことで、文章から離れた想像にならないように<u>支援する。</u></li> </ul>	<p>[思考・判断・表現] 観察</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・想像したことを生かしてペープサートを動かしながら音読している様子。</li> </ul>
	6	○「おてがみ」の大好きなところについて、ペープサートを使いながら想像を広げて読み、付け足しの一言を考える。 ※2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・付け足しの言葉を添えて何度も音読し、「もう付け足しの言葉は大丈夫」と、思ったら書き出すように伝える。</li> <li>・隣の人に聞こえるくらいの明確な発声を意識できるようにする。</li> <li>・自分で考えることとペアと交流することを繰り返す中で、<u>想像を広げていけるようにする。</u></li> <li>・吹き出し型の付箋に書くことが難しい児童は、友達と交流する中でヒントになったところを音読し、最後に付け足しの一言が付箋に書いたらよいとする。</li> <li>・特に大好きなところを一つに絞ることで、自分の思いを明確にできるようにする。</li> </ul>	<p>[思考・判断・表現] 吹き出し</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・吹き出しの内容。</li> </ul>
	7	○並行読書のお話の大好きなところについて、ペープサートを使いながら想像を広げて読み、付け足しの一言を考える。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・付け足しの言葉を添えて何度も音読し、「もう付け足しの言葉は大丈夫」と思ったら書き出すように伝える。</li> <li>・隣の人に聞こえるくらいの明確な発声を意識できるようにする。</li> <li>・自分で考えることとペアと交流することを繰り返す中で、<u>想像を広げていけるようにする。</u></li> <li>・吹き出し型の付箋に書くことが難しい児童は、友達と交流する中でヒントになったところを音読し、最後に付け足しの一言が付箋に書いたらよいとする。</li> <li>・特に大好きなところを一つに絞ることで、自分の思いを明確にできるようにする。</li> </ul>	<p>[思考・判断・表現] 吹き出し</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・吹き出しの内容。</li> </ul>
	本時			

8	○「おてがみ」でペープサートを使って音読している姿をタブレットで撮影し、自分の音読の仕方を確かめたり、工夫したりする。	・自分の動画を見て、ペープサートの様子を確かめる。 ・ <u>動画を見てペアと交流することで、更に想像を広げたり、工夫したりできるようにする。</u>	[主体的に学習に取り組む態度] 観察 ・動画を見て、更に工夫して音読している姿。
9	○並行読書でペープサートを使って音読している姿をタブレットで撮影し、自分の音読の仕方を確かめたり、工夫したりする。	・自分の動画を見て、ペープサートの様子を確かめる。 ・ <u>動画を見てペアと交流することで、更に想像を広げたり、工夫したりできるようにする。</u>	[主体的に学習に取り組む態度] 観察 ・動画を見て、更に工夫して音読している姿。
10	○「おてがみ」で『なりきりペープサート』をする。	・学級の人々に向けて、ペープサートを行う。 ・並行読書のときと同じように、屋台形式の場を設定にして行う。	[主体的に学習に取り組む態度] 観察 音読している様子。
11	○並行読書のお話で『なりきりペープサート』をする。	・同じ本を選んだ児童でブースを作り、屋台形式で発表をする。 ・時間内に同じ児童が何度でも発表してよいこととし、発表を繰り返す中で学習してきたことを出し切れるようにする。 ・6年生には、あらかじめこれまでの学習での頑張ってきたことや発表のめあてを伝え、そのことについて感想を言ってもらえるようにする。 ・単元を通しての振り返りを行い、それぞれの児童が学びを実感できるようにする。	[主体的に学習に取り組む態度] 観察 今までの学習を生かして音読している様子。

6 本時の目標 (本時：7 / 1 1時間目)

場面の様子に着目して、「がまくん」や「かえるくん」の行動や会話について具体的に想像して読み、付け足しの一言を考えている。

7 本時の評価規準

◎場面の様子に着目して、登場人物の行動や会話について具体的に想像している。

[思考・判断・表現] C (1) エ

8 本時の展開 (実線は、「読み解く力」のAの側面、波線は、Bの側面に関わる留意点や評価規準)

	主な学習活動等	指導上の留意点 (・) ICT の活用 (☆) 評価規準 (□)
3分	1. 本時のめあてをもつ。	・6年生に向けてペープサートをするというゴールを再度確認し、ゴールに向けてペープサートをよりよいものにしたいという気持ちが膨らむようにする。
	<b>大すきなところをもっといっぱいそうぞうして読んで、つけ足しの一言を考えよう。</b>	
4分	2. 前時を振り返り、付け足しの一言を考えるためのポイントを確認する。	・前時の学びを思い出し、今日の学習に生かせるようにする。 [ポイントの例] ・お気に入りの本文を指さして言葉を確認しながら音読する。 ・友達と好きなのところと一緒に読んでからお話する。 ・本文に続けて、付け足しの一言を言う。 ☆前時の活動の様子をICTを使って確認する。

20分	<p>3. ペープサートを使いながら、何度も音読し、付け足しの一言を考え、付箋に書く。【※3】</p> <p>①好きなところを声に出して読む。</p> <p>②ペープサートを動かしながら、会話を口頭で付け足してみる。(1回だけでなく何度も。隣の人に聞こえる声で。)</p> <p>③同じ話を選んでいいる子と並行読書マトリックスを見てペアを組む。【※5】</p> <p>④何度も相手を変えながらペアで練習してみる。</p> <p>⑤「もう付け足しの言葉は大丈夫」と思ったら、自席に戻って、もう一度付け足しの言葉を話してから、吹き出しカードに書く。</p> <p>⑥ペア学習の合間に、一人で言葉を考えて、練習してみたら、自席で①、②を繰り返す、自信がついたら③以降に戻る。</p>	<p>・付け足しの言葉を添えて何度も音読し、「もう付け足しの言葉は大丈夫」と思ったら付箋に記入するということを確認する。それを踏まえて、いくつも書いて貼っていてもよいし、難しい児童は、友だちと交流する中でヒントになったことを音読し、付け足しの一言が付箋に書けたらよいことを伝える。</p> <p>・自分で考えることとペアで交流することを繰り返す中で、想像を上げていけるようにする。</p> <p>・児童自らが交流したい相手を見付けていけるように、誰がどの話を読んでいけるかがすぐに分かる表（並行読書マトリックス）を掲示しておく。</p> <p>☆ゴールイメージや学習活動のイメージが具体的に分かるように、タブレットの中に見本となる動画を入れ、いつでも見られるようにしておく。</p> <p>・机間指導を行い、学習に困り感をもっている児童を見付けいたら、個別の支援を行い、その後の学習が改善されるようにする。</p> <p>[予想される困り感]</p> <p>・どんな風に付け足しの一言を考えればよいかわからない。 →教師の見本のビデオを見るように促す。 →付け足しの一言を考えられた子どもとつなぐ</p> <p>・付け足しの一言が本文から離れすぎている。 →本文を読んでから付け足しの一言を考えることを確認する。</p>
3分	<p>4. 想像した付け足しの一言の中から、とっておきの一言を決める。</p>	<p>・吹き出し型の付箋は想像したことを整理していくための手立てであるため、その枚数によって子どもたちに優劣がつかないように、最終的に付け足しの一言として、付箋は1枚に絞って貼るようにする。</p> <p>・とっておきの一言を決めることで、自分の思いを明確にできるようにする。</p> <p>□場面の様子に着目して、登場人物の会話を具体的に想像して吹き出しに書いている。 (思判表C(1)エ)</p>
5分	<p>5. 付け足しの一言を加えて、好きなところのペープサートを発表する。</p>	<p>・何人かの子どもが発表できるようにし、今日の学びを確認したり、最後に録音する際にお手本となるところはないか考えながら聞けるようにしたりする。</p>
7分	<p>6. ペープサートを使って音読している姿をタブレットで録画する。</p>	<p>・今日の学びの成果として、ペープサートを使って音読している姿を残せるようにする。</p> <p>・それぞれの児童が自分のタブレットで録画できるようにする。</p>
3分	<p>7. 学習を振り返る</p>	<p>・振り返りのワークシートを用意する。</p> <p>・今日の学習内容を踏まえて、次回どんなことをしたいかについて書けるようにする。</p> <p>[期待する児童の振り返り]</p> <p>・付け足しの一言が考えられたから、もっとなりきってペープサートができるようになりたいと思います。</p> <p>・付け足しの一言を入れてうまく言えなかったから、もっと上手になれるように練習したいと思います。</p> <p>・6年生に上手と言ってもらえるように、何回も練習したいと思います。</p>

#### 4. 授業の実際と分析

##### (1) 指導のねらいの明確化と言語活動の選定

授業構想段階では、授業者と筆者が共同検討する場をもち、単元構想の基本的な枠組みとなる付けたい力とそれに応じた言語活動の選定についての検討を進めた。指導事項としては、〔思考力、判断力、表現力等〕「C 読むこと」の指導事項(1)「エ 場面の様子に着目して、登場人物の行動を具体的に想像すること。」及び〔知識及び技能〕の(1)「ク 語のまとまりや言葉の響きなどに気を付けて音読すること。」を中心に取り上げることとした。その際の言語活動として、当初は音読発表会を想定した。その上で音読発表会はその実施形態が多様であることを踏まえるとともに、子供たちにとって魅力的なものにしやすいかどうかという点で再検討を進めた。その結果、指導のねらいの重点がC(1)エにあるということの確認に基づき、登場人物の言動を想像しやすく、学級の子供たちにとってもより魅力を感じられる「ペープサートでお気に入りの物語を紹介する」言語活動を選定することとなった。この検討により、「エ 場面の様子に着目して、登場人物の行動を具体的に想像すること。」という指導事項にふさわしく、かつ子供たちにとって魅力的で鮮明な単元の学習のゴールを設定することができた。

##### (2) 強く心に響く作品選択を可能にする手立て

教科書教材である中心学習材の「おてがみ」は、アーノルド・ローベル作のがまくんとかえるくんのシリーズ20作品の一つである。本単元では、これらのシリーズ作品から、子供一人一人が好きな作品を選ぶことができるようにしている。またこれらの作品については、単元の導入前から読み聞かせを行うなど丁寧に指導の手立てが取られている。(※1を参照)つまり、教材を教えること自体を目的とするのではなく、シリーズ作品の読みを通して指導事項である「C 読むこと」のエの指導事項を確実に指導できるようにしていると言える。これを学習者の視点で捉え直した時、子供たち一人一人にとって心に強く響く作品を手にとれることで、

個別最適な学びとなり、かつそれが指導のねらいのよりよい実現にもつながるように配慮されたものであると言えるだろう。

また、「おてがみ」を読む場合も、教師が一律に指定した箇所を読み取らせるのではなく、「大好きなところ」を見つけてペープサートで演じられるようにしている。(※2参照)物語の大好きなところに着目できるようにすることは、同一の作品を読む場合でも個別最適な学びを可能にする手立ての一つになり得る。このことはまた同時に、指導のねらいである「場面の様子に着目して」読むことを確実に身に付けさせる手立てにもなっている。この指導事項は、〔思考力、判断力、表現力等〕の事項である。そのため、教師が指示した場面に着目させるのではなく、読者である子供自身がどの場面に着目するかを判断して読む能力を求めているものであると捉えることができる。そのため子供にとって「大好きなところ」を見つけて読むことが重要な意味をもつ。こうした指導事項の精緻な趣旨の把握に基づいた指導が、個別最適な学びの実現のための基盤となると言えるだろう。更に言えば、「お話の大好きなところを見つけて読む」、「お気に入りの物語を選んで読む」といったことは、物語を読む際の本質的な行為であるとも捉えられるだろう。

##### (3) 学習活動や方法を選択できるようにする工夫

本時の学習活動3では、「ペープサートを使いながら、何度も音読し、付け足しの一言を考え、付箋に書く。」という活動が行われた。(※3参照)学習指導案では20分を予定していたが、実際には25分程度の時間を、子供たち自身が学習の進め方を判断し、隙間なく学習を続けていた。ここが典型的なロングレンジの学習活動と言えるものである。具体的には学習指導案上に記されている学習活動3の①～⑥までを、それぞれの子供が判断して学習を進めていた。

従来学習指導であれば、低学年の子供たちに対して①～⑥のような活動を一つ一つ区切って行わせることが多かった。学習の初期段階で

はこうした手立ては重要であると考えられる。しかしいつまでも教師の指示がなければ学習を進められない状況を求めるものでは決していないだろう。例えば③、④のようなペア学習の場面では、教師が指示した相手と、時間を決めて交流させることが多かった。しかし早々に交流が終わってしまう子供もいる一方で指定の時間内では交流しきれない子供もいるなど、一律に時間を区切ってしまうことで、時間を持って余してしまったり、反対に時間が足りずに対話を中断せざるを得なかったりする場合も見られた。

更に子供にとって交流の相手を判断できるということは重要な意味をもつ。こうしたことが可能になることによって、交流が単に指示された作業をこなすようなものでなく、2年生の子供であってもきちんと自ら相手を求めて交流する、より自律的な学びを引き出す手立てとなる。

本時の学習での子供たちの姿は、時間を持って余したり、何をしてもよいか分からなかったりする姿ではなく、どの子供も自ら判断して学び進める姿が実現していた。

#### (4) 子供たちが自律的に学習内容やその進め方を判断できるような支援の手立て

前項で述べたような姿は、本単元での教師の以下のような緻密な手立てによって実現されたものと言える。

##### ①魅力的な単元のゴールの設定

ペープサートでお話の大好きところを演じる活動は子供たちにとって楽しい活動である。しかし単にその場で指示されてペープサート動かす断片的な活動にとどまるのでは、指導のねらいを実現する上では十分ではない。本単元では、単元のゴールとして「6年生に、シリーズのお気に入りの作品を選んで、大好きなところをペープサートで紹介する」という目的を、単元の冒頭から子供たちが「やってみたい」と思えるように丁寧に提示している。(※4参照) また単元の導入部のみならず、各単位時間の学習が、このゴールに密接に結び付くように単元を構成している。このことによって、単位時間の学習においても、子供たちがどこに向かって、

どのように学び進めればよいのかを自覚できるようにしている。

##### ②子供たちが作品を選べるようにする手立て

シリーズ20作品から、子供たち一人一人がお気に入りの作品を選べるように、単元の導入前から読み聞かせを行うなど、丁寧な手立てが取られている。

関連する作品を教室において読ませる際、なかなか本を手にとらない子供が見られる場合がある。多様な状況の子供たちを念頭に置けば、読み聞かせをしたり、友達同士で紹介し合ったり、教師と一緒に読んだりするなどといったきめ細かな個に応じた指導が、個別最適な学びの実現には重要になる。

##### ③教師のモデルの提示

単元の導入では、教師がペープサートで演じて紹介するモデルの動画を活用している。(※4参照) 導入でのモデル提示は、子供たちにとってゴールをより鮮明にイメージする手立てになる。この動画はタブレットに入れて、子供たちが必要なタイミングでいつでも再確認できるようにしている。

これに加えて、教師がモデル動画を撮影してみることは、教師自身の教材研究にもなる。ペープサートで演じるという行為を実際に行ってみることで、単元の指導のねらいに迫るにはどのような所作が必要なのか、子供たちにとって無理がなく魅力的なものか、そのゴールに至るには、どのような読みのプロセスを踏めばよいのかが明らかになる。こうした手続きが確実に取られることによって、活動あって学びなしといった状況に陥ることを避け、子供たちが自律的に学び進めるための道筋を、教師として明確に描くことが可能となる。

##### ④単元の学習の見通しをもつための工夫

前項のように、子供たちの学びの道筋を明確に描いた上で、それを十分子供たちと共有することが大切になる。本実践では、以下のような単元の学習計画を掲示し、視覚的にも子供たちが常に意識できるような手立てが取られていた。

こうした手立てが、子供たちの見通しをもった学習の成立には重要になる。

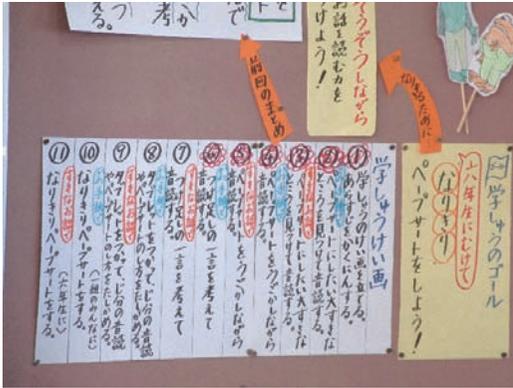


写真1：単元の学習計画表の掲示

### ⑤単位時間の精密な授業構想

前述の通り、本時の学習指導案には、ロングレンジの学習活動における具体的な学びの姿が精緻に想定されている。(※3参照)

例えば「②ペーパーパートを動かしながら、会話を口頭で付け足してみる。(1回だけでなく何度も。隣の人に聞こえる声で。)」といった記載に見られるように、子供たちが一人で読む過程においても、ペーパーパートを動かしながら読むことで「登場人物の行動を具体的に想像すること」という指導のねらいの実現に向かって行く学習となるように配慮していることが分かる。また「1回だけでなく何度も。隣の人に聞こえる声で。」といった点に留意することで、確実に読みを自覚的なものにしていくことができるようにしている。また前述の通り、これを一つ一つ区切って進めるのではなく、連続的に展開できるようにしている。

従前であれば、「一人で考える。」「ペアで交流する。」といった大づかみな想定のみで本時に至るケースが多く、そのため逐次の指示を出して子供の学習を進めざるを得ないケースが散見された。本実践のように、事前に精緻に必要な学習活動を想定することによって、それを子供が進めるための手立てを打つことが可能になる。

### ⑥意図的な交流を促す並行読書マトリックスの活用

個別最適な学びが孤立した学びにならないようにするためには、交流を実質化するための手

立てが重要になる。本実践での子供たちのペア交流の姿は、準備したものを読み上げるようなものではなく、「聞いてほしい」、「一緒に考えてほしい」、「友達がセリフを想像するのを聞きたい」といった思いをたっぷりもったものだった。

こうした協働的な学びを実現するため、次のような「並行読書マトリックス」が活用されていた。(注6) (※5参照)

これは、縦軸に子供たちが読んでいるシリーズの作品名、横軸には子供の名前が配列された一覧表である。子供たちは読んだ作品については黄緑色のシールを貼り、そこから選んで紹介しようとする作品については、金色のシールを貼っている。これを参照することで、例えば「同じ物語を選んでいる友達と交流したい」、「違うお話を選んだ友達はどんなところを紹介するのか聞いてみたい」といった判断を伴う交流が可能になる。またこうした掲示を活用することで一層シリーズ作品の読書も促進される。

はるがきた	おはなし	くしたボタン	すいせい	おてがみ	よていひょう	くめをだせ	クッキー	わくわくないやい	まくんのゆめ	そのかどまで	ソリスベリ	イスクリーム	おちば	リスマス・イブ	したするよ
●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●

写真2：並行読書マトリックス

本時においては、こうした掲示を活用しつつ、交流相手を判断しながら、何度もペア交流を繰り返し、叙述から想像した登場人物の会話をより確かなものとして自覚していく子供たちの姿が実現されていた。

### ⑥交流のモデル動画の活用

本単元の実践では、特に充実した子供たちの交流の様子を動画撮影し、その後の学習指導で子供たちと視聴することで、ペア交流のイメージを確実に共有する手立てが取られた。

⑦類似の交流学習を取り入れた習熟のための手立て

本実践で見られたような子供たちの自律的な学びは、1単位時間の指導だけで成立するものではない。前掲のような多彩な手立てに加えて、国語科のみならず他教科等の学習活動においても、「考えをもつ」－「交流する」－「交流して考えがまとまったら書き出す」といった一連の学習過程を意図的に取り入れて習熟を図ることも行われている。

5. 考察－小学校国語科における個別最適な学びと協働的な学びの実現に向けた授業づくりの展開に向けて

(1) 多様な子供たちを念頭に置いた指導

本実践においては、子供たちが自律的に学び進める姿が十分に見られた。こうした学びの姿は、一定程度以上の学力水準の子供たちがほとんどを占める学級でのみ成立するわけではないと考えられる。むしろ多様化し、個人差が大きいという実態において、一層効果的に実現するものである。一律一斉に学習を進めようとする、子供たちの学習状況を揃えるための時間がかかってしまうからである。子供たちが自分にとって必要な学習活動を、試行錯誤しながら一人一人が最適なものに調整できるようにすることで、学びの姿も一層自律的になっていく。

(2) 国語科の基本的な枠組みを踏まえた授業構想

本時の学習において、ロングレンジの学習活動の効果が発揮された前提として、指導事項を吟味し、指導のねらいを明確に見定めた上で、それにふさわしい、単元のゴールとなり過程となる言語活動を適切に位置付けていることが挙げられる。つまり単位時間や単発的な学習活動のみを取り出した授業構想ではなく、単元全体を精緻に組み立てることが重要な前提になる。

(3) 子供たちにとっての必然性を検討して授業構想を進める

本時の学習では、子供一人一人が強く心に響

く作品を選んで読み、ペープサートで演じるというゴールに向かって、夢中になって取り組み続ける質の高い学びの姿が得られた。

子供たちが自律的に学び進める学習活動を実現する上では、単元全体と各単位時間の学習活動が子供にとって必然性のあるものとなることが大切である。授業構想段階においては、この視点から繰り返し、子供にとって学ぶ価値を実感できる学習活動となっているかを検討していくことが重要になる。

6. まとめと展望

本論考では、実践事例を取り上げて、小学校国語科における個別最適な学びと協働的な学びの実現を目指す授業の在り方について、ロングレンジの学習活動の概念を取り入れつつ検討してきた。

現在ではこうした実践が様々に取り組まれ、徐々に一層多彩な手立てが開発されているところである。今後は、こうした実践をより多く集約するとともに、授業実践に際して参考となる形で、その成果を普及していくことが求められるだろう。

注

- 1) 中央教育審議会「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申)』、令和3年1月
- 2) 同上「3 変化する社会の中で 我が国の学校教育が直面している課題」「②今日の学校教育が直面している課題」(子供たちの多様化)の項を参照。
- 3) 水戸部修治「子供の側に立って学習指導を構築する」『実践国語研究』No.366, 明治図書, 2021, pp.45
- 4) 水戸部修治「学び手の判断を生かす」『実践国語研究』No.371, 明治図書, 2022, pp.58-59
- 5) 本授業の実践は、滋賀県彦根市立金城小学校教諭、北川彩氏によるものである。また本授業実践は、滋賀県教育委員会が2019年から3年間にわたって展開した「読み解く力プロジェクト研究」の一環として実施され、本時の授業は多くの参会者を得て行われたものである。筆者はこの研究のトータルアドバイザーとして、本授業実践についても、構想段階から参加する機会をいただいた。

- 6) 国立教育政策研究所『小学校国語科映像指導資料～言語活動の充実を図った「読むこと」の授業づくり』（平成28年）の「事例3」にも同様の事例が紹介されている。近年の実践では、学年の発達の段階に合わせて形式を工夫したりICTで作成・活用したりするなどのバリエーションが見られる。

## 文献

文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説国語編』，2018

## 謝辞／付記

本論文は、JSPS 科研費 JP21K02534 の助成を受けたものである。また、本論文で取り上げた実践の授業者である滋賀県彦根市立金城小学校教諭、北川彩氏とその実践を学校全体で実現していただいた金城小学校の教職員の皆様、貴重な共同研究の機会をいただいた滋賀県教育委員会の皆様に心より感謝申し上げます。